



# 香曾我部義則先生の今月のカルテ ⑤1

## 慢性痛とペインクリニック

■プロフィール こうそがべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に、平成16年から現職。日本麻酔学会専門医、日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、痛みの治療について説明してくれるコラム。今回は激しい痛みを伴うといわれている、がん治療についてです。最近では痛みに対する治療法が進歩し、がん性疼(とう)痛の80%は除痛、あるいはかなり軽減できるようになっています。



痛みの分類



がん患者の多くが体験する、耐え難い痛み  
症状ごとに異なる治療法を紹介します

がんの痛みは初期から末期に至るまでの病期にも発生します。末期がん患者は毎日が痛みと闘いになり、肉体的にも精神的にも苦痛を負います。50%以上が激痛を伴うといわれています。

がんの痛みは持続的で強く、多くは耐え難いものです。がんによる直接的な痛みだけでなく、手術、放射線治療、化学療法などの刺激に反応して生じるもので、組織の損傷に一致した痛みが生じます。外傷やけがによる痛み、脊(せき)せき(脊)管狭窄(きょうさく)症(しょう)や椎間板(ついかんばん)ヘルニアによって神経が圧迫(おさ)せられる痛みが代表され、急性痛の原因となります。

第1の「侵害受容性疼痛」とは炎症や組織損傷などの刺激に反応して生じるもので、組織の損傷に一致した痛みが生じます。外傷やけがによる痛み、脊(せき)せき(脊)管狭窄(きょうさく)症(しょう)や椎間板(ついかんばん)ヘルニアによって神経が圧迫(おさ)せられる痛みが代表され、急性痛の原因となります。

第2の「神経障害性疼痛」は末梢(まっしょう)痛(いた)みと中枢神経系の障害および機能の異常によって生じる痛みです。これは帯状疱疹(ほうしん)後(ご)神経痛(カウザルギー)、糖尿病性多発神経障害などに代表される慢性痛です。代表的な、疼(うず)くような痛みを主体とし、触った

法などのがん治療にも痛みが伴います。そのためがん患者は毎日が痛みと闘いになり、肉体的にも精神的にも苦痛を負います。50%以上が激痛を伴うといわれています。

一般的に痛みを簡単に分類すると、図1のような3つの病態に分けるとができます。

日常生活で体験する痛みとは基本的に異なるため、がんの痛みを「全人的疼痛」と捉えることが必要です。従って、治療に当たっては①身体的疼痛②精神的疼痛、③社会的疼痛、④スピリチュアルペインの4つの因子すべてに対応する事を基本にしなければなりません。

梶木病院(西花尻) 香曾我部義則(2003)030509